

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2026年1月29日

年末年始に読んだ本／2025－2026

○『ふしぎなキリスト教』橋爪大三郎×大澤真幸（講談社現代新書）

皆さんは「宗教」にどんなイメージを持っているでしょうか？危ない、アヤシイ、うさん臭いなどといったマイナスの評価を持つ人も少なくないでしょう。宗教と聞くと、それだけで身構えてしまう傾向が、現代日本人にはあるようです。外国と比較して、一般に日本人は特定の宗教や信仰を持たない人が多いとされています。一方で無宗教を自認しながら、クリスマスを祝い、正月には神社に初詣に出かけ、葬式ではお寺のお坊さんにお経をあげてもらう日本人のなんと多いことか。勉強がまったく間に合わずに迎えたテスト当日、「神様、仏様、どうかお助けください！」と祈ったことはないでしょうか？（筆者はあります。）

私たちの生きる社会は、直接、間接を問わず、宗教の深い影響を受けながら成立してきました。例えば、飛鳥時代に日本に伝来した仏教は、国家統治の新たな理念となり、独自の文化を形成する基盤となりました。16世紀、フランスのカルヴァンによって説かれた予定説（キリスト教で、誰が救われ、誰が滅びるかは、あらかじめ神によって定められているとする説）は、資本主義の発展をうながしたと言われていています。（注1）

明治以降、日本が一心不乱に進めてきた近代化の歩みとは、言い換えれば西洋型の社会や西洋的な価値観を受け入れ、推進しようとする動きでした。その西洋文明の中核に位置するものの一つがキリスト教であることに、異論をさしはさむ余地はないでしょう。近代とは何か、西洋とは何かを考えると、キリスト教についての理解が不可欠である、と『ふしぎなキリスト教』は述べています。

『ふしぎなキリスト教』は、宗教社会学者の橋爪大三郎さんと社会学者の大澤真幸さんとの対談形式で書かれた本です。キリスト教と、今や地球全域に広がり、グローバルスタンダードとなった西洋文明の関係、さらにはそこから波及する日本に関連する問題が、二人の丁々発止ちようちようはっしの会話の中で掘り下げられていきます。実は十年ほど前に一度読み、この年末にふと思立って再読してみました。記憶どおり、期待どおり、知的好奇心を刺激し、知的な楽しさを堪能させてくれる一冊でした。

『ふしぎなキリスト教』では、①キリスト教と、その起源となるユダヤ教との関係、②イエス・キリストとは何であったか、③キリスト教がその後の歴史や文明に与えたインパクト、という三つのテーマに従って対談が進んでいきます。

まず、①キリスト教とユダヤ教の関係について。キリスト教はユダヤ教を母体として紀元1世紀中頃に誕生するわけですが、両者の特徴は一神教であるということです。ちなみに世界の宗教

は、神様がたくさんいる多神教が一般的です。日本神道も「^{や およろず}八百万の神」がいて、^{しん ら ばんしやう}森羅万象あらゆるものに神が宿るという世界観を持っていますよね。多神教の神々は、多くの場合、とても人間的です。人間と同じように、喜んだり、怒ったり、恋をしたり、嫉妬したり、神々同士でケンカもします。「どうかお金持ちにしてください」といった世俗的な願い事に耳を傾けてくれるのも、多神教の神々の特徴です。

一方で、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教など一神教では、世界はたった一人の全知全能の神によって創造されたと考えます。神は人格を持ち、人間とことばで交流し、契約を結ぶ存在です。神は直接人間の前に姿を現し、教えを授けることもあります(注2)、多くの場合、^{よげんしや}預言者(注3)と呼ばれる、神の声を聞く能力を持った人を通じて民衆にことばを届けます。一神教の神は、厳格な神です。人間が自分以外の神を崇拝することを許しません。もしも、人間が自分との契約を破ったり、他の神を信仰するようなことがあれば、厳しい罰をくだします。(アダムとイブのエデン追放や、ノアの箱舟の話などは有名ですね。)

大澤さんは、キリスト教は「二段ロケット」のような構造を持っている、といます。前述の通り、先にユダヤ教があって、そこからキリスト教が生まれてくるわけですが、キリスト教の特徴は、一方でユダヤ教を否定しながら他方で保存している点、自らが否定し乗り越えたもの(ユダヤ教)を自分自身の中に組み込んでいる点だ、と述べています。その分かりやすい証拠が、キリスト教の聖書です。キリスト教の聖書は、ユダヤ教の聖典であった旧約聖書と、イエス・キリストの登場後に成立した新約聖書から成っています。このような世界宗教は他に例がない、と大澤さんは指摘しています。

橋爪さんも、ユダヤ教とキリスト教は「ほとんど同じ」だと述べています。同じ一神教で、しかも同じ神をあがめている。この神は、ヤハウェ、エホバなどの名を持ち、父とか主と呼ばれている。それではユダヤ教とキリスト教の違いは何か？橋爪さんはこう言っています。「たったひとつだけ違う点があるとすると、イエス・キリストがいるかどうか。そこだけが違う、と考えてください」

それでは、そんなイエスキリストとは何であったか、という②の問いについて。この世に存在したすべての人類の中で、後世に最も大きな影響をおよぼし、最も謎に満ちた人物、それがイエス・キリストではないでしょうか。聖母マリアが処女懐胎して生まれたイエスは、5つのパンと2匹の魚で何千人もの人々を満腹にし、婚礼の席で水をブドウ酒に変え、墓の中から死者を蘇らせるなど数々の奇跡を起こしたとされ、聖書ではまるで超能力の持ち主のように描かれています。しかし、おそらくそれは後の人々の創作や想像の産物でしょう。

よくイエス・キリストを、キリスト教の創始者と考える人がいるが、それは間違いだ、と橋爪さんは言います。ちなみにイエスは、キリスト教徒でさえありません。橋爪さんは歴史上のイエスについて、おそらく実在の人物で、「ユダヤ教の改革者」だったと考えています。貧しい山間の村ナザレに大工の子として生まれ、旧約聖書やモーセの律法について学び、三十歳前にナザレを出て洗礼者ヨハネの教団に加わり、その後教団を離れ独自の活動を始め、預言者またはメシア(救世主)のようにふるまい、また一部の人々からはメシアの到来と考えられ、当時のユダヤ教の中心だったパリサイ派やサドカイ派の人々の怒りをかい、エルサレムで逮捕され、十字架上で死刑になった人物、としています。

そんなイエスがどうして現在のような信仰の対象となり、キリスト教が世界宗教となっていたのでしょうか。イエスにまつわる数々の奇跡の中で、最大のものが復活の奇跡です。十字架の上で

死んだイエスは、墓(洞窟の入り口を大きな岩で塞ぐ形式)に葬られますが、翌朝、人々が墓を訪れると、入り口の岩が動かされ、墓の中は空っぽになっていました。その後、イエスはガリラヤ地方で弟子たちの前に姿を現し、天へ昇っていったとされます。メシアとして人々を救うためにやってきたはずのイエスが、処刑され、復活して天に昇ったのにはどんな意味があるのか。

橋爪さんは、ここでイエスは「神の子」だという考え方が生まれた、と述べています。「神の子」とは何者か、という定義は複雑で難しいのですが、それまでの預言者とも、単なるメシアとも異なる、神そのものに限りなく近い存在、と説明できるでしょうか。いずれにしても「神の子」イエスは、人類の救済のため地上に降り立ち、自ら十字架の上で死ぬことで、人類が犯した罪(神に対する罪)をすべて肩代わりしてくれた、とキリスト教では考えます。この行為を贖罪しよくざいといひます。

イエスは「神の子」だ、という考え方を確立し、広めたのは、パウロという人物です。キリスト教の聖人の一人ですが、実は生前のイエスとの面識はありません。パウロはもともとユダヤ教徒で、新興のキリスト教徒を迫害する立場でした。それが、ダマスカスに向かう旅の途上で、天からの光とともに「なぜ私を迫害するのか」というイエス・キリストの声を聞き、キリスト教に回心したと言われています。イエスはパウロにより「神の子」として神格化され、その生涯は新約聖書としてまとめられ、その行いは旧約聖書の預言の成就であると考えられるようになりました。キリスト教はパウロにより大帝国ローマに伝えられ、世界宗教への第一歩を踏み出すことになるのです。

最後に③キリスト教がその後の歴史や文明に与えたインパクトについて。キリスト教のインパクト、影響がいかに大きいものだったかは、仮にキリスト教が生まれなかったら、仮に地方の一宗教にとどまり、ヨーロッパ全域に広まらなかったら、と想像してみると実感できるかもしれません。『ふしぎなキリスト教』では、激しい迫害と受難の期間を経た後、ローマ帝国唯一の国教となったキリスト教が、帝国の東西分裂にともない東方教会(正教)と西方教会(カトリック)に分かれ、さらに16世紀、ルターやカルヴァンの宗教改革によってカトリックから分離する形でプロテスタントが誕生するという歴史の中で、政治や経済、自然科学や哲学にいかにも影響をおよぼしていったかを説明しています。その詳細は、とてもこの紙面で書き尽くせるものではないので、興味を持った人は『ふしぎなキリスト教』を手にして読んでみてください。

数あるキリスト教の不思議の中で、筆者が特におもしろいなと思ったのが、「近代化において、イスラム教ではなくキリスト教(カトリック)圏が主導権を握ったのはなぜか」という問題です。この問題を提起した大澤さんは、「キリスト教よりもイスラム教の方が、合理的で首尾一貫性が高く、信者獲得は容易であったはずだ」と述べています。

この問いに対して橋爪さんは、宗教改革や新大陸の発見、産業革命、資本主義などさまざまな要素をあげたうえで、「でも、最も根本的なところで、いちばん大事な点を取り出すとすれば、それはキリスト教徒が自由に法律をつくれる点だと思う」と答えています。ユダヤ教やイスラム教には宗教法(律法)が存在します。「盗んではならない」「殺してはならない」「神をあがめなければならない」「男性はひげを伸ばさなければならない」等々、こうした宗教法の伝統では、法をつくる主体(立法者)は神です。人間も法をつくることはできますが、それはあくまで神の法に準ずるものであり、神の法を覆くつがえすことはできません。これに対しキリスト教会は、そもそも法律をつくりません。その理由を橋爪さんは、初期キリスト教会は、ローマ帝国のただの任意団体で、力がなくてつくれなかったから、と説明しています。いずれにしても宗教法という束縛をもたなかったキリスト教徒は、それぞれの社会や、環境に応じて法を作ることが可能でした。ローマ時代にはローマ法

を、ローマ帝国がなくなればゲルマン慣習法を守り、そういう法律が時代遅れになれば、自分たちで新しい法律をつくり、議会制民主主義を始める、といったやり方ができたのです。「社会が近代化できるかどうかの大きなカギは、自由に新しい法律をつくれるか、です」という橋爪さんの説明に、筆者は「ふーむ」と深くうなずいたのであります。

『ふしぎなキリスト教』は十数年前にベストセラーとなった本で、もしかすると生徒諸君もどこかで目にしたことがあるかもしれません。最初の方でも書きましたが、とにかくおもしろくて知的興奮をかきたてられる本です。今、自分がここまで書いた文章を読み返して、そんな『ふしぎなキリスト教』の魅力をごくまで伝えられたか、不安と疑念しかありません。そういうわけですので、宗教に興味のある人もない人も、たまされたと思って一度読んでみることをお勧めします。

以前、ある大学の推薦入試で『ソフィーの世界』(注4)を読んで、哲学と宗教の違いについて論じなさい」という小論文の課題が出され、高3の生徒に添削を頼まれたことがありました。添削といっても、何をどう書いたらいいのかまったく分からない、と言うので、自分が質問し、生徒がそれに答え、答えた内容を文章としてまとめていく、という方式をとり、結果的に「哲学は理性によって真実を究めようとするが、宗教には人間の理性では到達し得ない、神のみぞ知る不可知の領域が存在する」という結論で小論文を仕上げさせました。

入試では、受験生が書いた小論文にもとづいて口頭試問が行われるらしいのですが、推薦入試前日(たぶん日曜日)、その生徒から「自分で書いた小論文をあらためて読んだのだけれど、こんがらかって、自分でもよく分からなくなっていました」と半泣きで電話がかかってきました。学校も閉まっているので、仕方なく近所のファミレスで待ち合わせ、ドリンクバーの煮つまったコーヒーを飲みながら小論の内容をおさらいし、入試に送り出したことがあります。今回の文章を書いている中でよみがえってきた、四半世紀も前のなつかしい思い出です。

注1)カルヴァンの予定説と資本主義

誰が救われ、誰が滅びるかは神によってあらかじめ完全に定められており、人間の努力や善行では変えられないとするカルヴァンの予定説は、人々が、自分は救いの対象であることを社会的に証明しようとする動機となり、与えられた職業に真面目に励み、成功を収めることがその証明であり、神への奉仕になるという考え方を生み、結果として資本主義の発展を促したとされる。

注2)神は直接人間の前に姿を現し、教えを授けることもある

預言者モーセが、シナイ山で神から直接に十戒が彫られた石版を与えられた、など。

注3)預言者

神からの言葉を聞き、それを民衆に伝える役割の人物。「預言」は、神から人間に与えられるメッセージの意味で、未来を言い当てる「予言」とは異なる。ちなみに、イエス・キリストは、キリスト教では「神の子」、メシアとされているが、イスラム教ではモーセやムハムド同様、預言者の一人として位置づけられている。

注4)『ソフィーの世界』

ノルウェーの作家ヨースタイン・ゴルデルによって書かれた哲学の入門書。14歳の少女ソフィーが謎の手紙を通じて西洋哲学史を学んでいく物語。日本では1995年に刊行されベストセラーとなった。

○『歴史修正主義／ヒトラー讃美、ホロコースト否定論から法規制まで』武井彩花著(中公新書)

ちょっと、こんな場面を想像してみてください。日曜日の朝、というか昼近く、君は大寝坊して目を覚ましました。家族は全員出かけてしまったらしく、家には誰もいません。おなががすいたなあ、と思って君は冷蔵庫を開けます。するとそこには、おいしそうなプリンが。ラッキー！と思った君が、さっそく食器棚からスプーンを取って、プリンを三口ほど食べたところで、君の脳裏にある記憶が稲妻のように走りました。

君には三つ年の離れた姉がいます。その姉が、先日ある有名な洋菓子店の高級プリンを30分も並んで買った、すぐに食べるのはもったいないから冷蔵庫にしまっておくけど、「絶対に食べないでね！」と言っていたのを、今思い出したのです。すでに半分ほどになったプリンを見つめながら、君は「やばい…」とつぶやきました。帰宅してプリンがないことに気づいた姉は、まず君に事情を尋ねるでしょう。そして、君がプリンを食べってしまったことを知ったら、姉は烈火のごとく怒るに違いありません。気の強い姉のことですから、単にプリン代を弁償するくらいではおさまらず、無理難題を迫ってくるかもしれません。

「いや、待て。こんなときこそ冷静になれ。冷静に状況を見極めることが大切だ」と君は自分に言い聞かせます。そして、どうしたら姉の怒りのほこ先をかわせるか、対応策と問題点をノートにまとめることにしました。

【プリン食べかけ問題に関する平和的解決のための試案と課題】

試案①食べかけのプリンをそのまま冷蔵庫に戻し、自分は食べていないと言い張る。

課題: 出かける前に姉が、冷蔵庫のプリンの存在を確認していたとしたら、一人だけで家にいる自分に嫌疑が向けられることは必然であり、言い逃れが成功する確率は低い。

試案②プリンの容器を普通にゴミ箱に捨てておき、姉に聞かれたら「えっお姉ちゃん、きのう自分でプリン食べてたじゃん。忘れちゃったの？いやだなあ～」とごまかす。

課題: 姉が自分でプリンを食べたか、食べないかを記憶していない可能性は極めて低く、逆にウソがばれた時点で、火に油を注ぐ事態になりかねない。

試案③今から速攻でコンビニに行ってプリンを買って、有名店のプリンの容器に入れかえて冷蔵庫に戻しておく。

課題: コンビニのプリンと有名店のプリンが同じサイズ、見た目であるか不明である。また、スイーツにうるさい姉がプリンを食べた際、コンビニのプリンと有名店のプリンの味の違いに気づくリスクは高い。

さあ、君だったらどの方法を採用するでしょうか？

さて、君が①～③のどれを選択したとしても、君が行おうとしている行為は「歴史修正主義」という批判をうけるかもしれません。君が冷蔵庫のプリンを食べてしまったのは、否定しようのない事実であり、「歴史」であるにも関わらず、何らかの意図を持って、その歴史を隠蔽、またはねつ造しようとしているからです。

『歴史修正主義』(中公新書)の中で著者の武井さんは、「歴史修正主義」を「歴史的事実の全面的な否定を試みたり、意図的に矮小化したり、一側面のみを誇張したり、何らかの意図で歴史を書き替えようとする」と説明しています。世の中には(近年、特にネット上では)、ピラミッドは、当時の人間の技術では作ることができず、実は宇宙人によって作られた、ローズベルト大統領は日本の真珠湾攻撃を事前に知っていたが、アメリカを第2次世界大戦に参戦させる目的であえて攻撃させた、1969年のアポロ11号による月面着陸はねつ造で、宇宙飛行士が月面を歩くシーンはハリウッドのスタジオで撮影された、など「トンデモ歴史」が、まことしやかに語られています。

一方で、歴史学者である武井さんは、「歴史を新たな知見で“修正”すること自体は、必ずしも悪いことではない」とも述べています。かつて鎌倉幕府の成立は、頼朝が征夷大将軍に任命された1192年(イクニ作ろう鎌倉幕府)とされていましたが、近年の歴史学の進展により、国単位での守護・地頭の設置が認められ、頼朝が全国的な軍事・警察権を掌握した1185年(イイハコ作ろう鎌倉幕府)がふさわしいと解釈の転換が起っています。新たな知見が、歴史を修正した例といえるでしょう。

「歴史を特定の意図で都合のよいように“書き替える”ことと、過去の出来事に違った角度から光を当てて歴史を“書き直す”こと」の違いを、私たちはどのようにして見分けたら良いのでしょうか。

『歴史修正主義』では、第2次大戦とナチズム(注1)、とりわけナチスの行ったホロコーストに関わる歴史修正にスポットがあてられています。ホロコーストとは、第2次大戦中にナチス・ドイツが組織的に行った、ユダヤ人を中心とする人々への大虐殺のことです。アウシュビッツをはじめとする強制収容所に連行され、ガス室などで組織的に殺戮されたユダヤ人の数は600万人におよぶと言われています。ホロコーストの背景には、ヨーロッパに根深くはびこる反ユダヤ主義、人種差別主義(レイシズム)が存在すると言われています。

ところがこの人類史上類を見ない残虐な戦争犯罪に対して、「ホロコーストは存在しなかった」と主張する人たちがいます。『歴史修正主義』では、その実例を一つ一つ具体的に紹介し、そうした主張がどのように生まれたのか、そしてその理論がどこで破綻をしているのかを丁寧に解説しています。読んでいて驚かされたのは、ホロコースト否定論を唱える人物は、一人や二人でなく、なおかつその主張を行うことへの情熱は並大抵ではないということ、そして、物的証拠や歴史的知見が、ホロコースト否定論自体を否定しても、またどこからか「ホロコーストは存在しなかった」という声が聞こえてくる、ということです。『歴史修正主義』では、繰り返されるホロコースト否定論に共通する論点を次のようにまとめています。

- ・ユダヤ人の犠牲者数の下方修正(600万人も死んでいない)
- ・毒ガスによる殺害の否定、もしくはガス室の存在の否定(アウシュビッツにガス室はなかった)

- ・ホロコーストの原因を犠牲者側に転嫁(ユダヤ人がドイツに戦争を仕掛けた)
- ・シオニスト(注2)によるホロコーストの政治利用(イスラエルは「嘘」でドイツから補償金を搾り取る)

なぜ、ホロコースト否定論は生まれたのか、そして、物的証拠や歴史的知見が、否定論を何度くつがえしても、否定論は亡霊のようによみがえってくるのか。

武井さんは、ホロコースト否定論を生む土壌として、「ネガティブな過去に立脚する国民意識の拒絶」をあげています。第2次大戦において、ナチスドイツは英米仏ソなどの連合軍に敗れ、ドイツの戦争犯罪は国際軍事裁判(ニュルンベルク裁判)によって世界に知らしめられることとなりました。私たちは皆、ある国家に属する国民としての自意識を持っています。国民は、自分たちの歴史や文化に関する共通した「国家の物語」によって結びつけられているわけですが、武井さんは、「第2次大戦敗北後のドイツは、掘って立つ国民の物語が欠落した状態にあった」と述べています。他国への侵略や虐殺という加害の歴史を、国民の共通の物語とすることはできない、「普通」の国としての歴史、恥じる必要のない国民の物語への希求が、ナチズムの歴史を修正する動機となった、というわけです。

ホロコースト否定論は、ドイツからのみ生まれたわけではありません。戦時中、ドイツに占領されたフランスなど他国からも生まれてきます。その理由について武井さんは、ナチスドイツの占領下のフランスでは、傀儡であるヴィシー政権が発足し、国家的な対ナチス協力が行われ、一部の市民がユダヤ人の排除に手を貸した点などをあげています。

歴史には「公知の事実」というものが存在します。それは、ちょうど「太陽は東から昇る」のように、一般に広く知られており、あえて証明する必要のない事実をいいます。「関ヶ原の戦いで、徳川家康率いる東軍は、石田三成の西軍に勝利した」「1789年、パリ市民がバスティーユ監獄を襲撃し、フランス革命がはじまった」などは、歴史上の公知の事実といえるでしょう。

ニュルンベルク裁判が開廷されていた当時、ドイツにより巨大な犯罪が行われたことは、わざわざ証明するには及ばない公知の事実でした。強制収容所の死体の山が、何よりの証拠でした。しかし、出来事が起こった当初は誰もが当然の事実として受け入れていたことでも、時間が経てば事実は体験に基づくものではなく、疑念を差し挟む余地が生じるものです。何らかの意図をもって事実を否定したい人たちは、その余地につけ込もうとするかもしれません。ホロコースト否定論者たちは、強制収容所の写真や映像にある死体の山をねつ造だと主張し、本物であることを証明せよと要求したのです。

歴史は、歴史的な証拠によって証明できる、と武井さんは言います。しかし、どんなに証拠を示しても「ねつ造だ」として否定する人たちがいます。そして本来、公知の事実に対して「ねつ造」を主張する側が、自説の正しさを立証すべきなのに、疑いをかけられた側が「ねつ造でない」ことを証明しなければならない事態が生じます。歴史修正主義者は、証明の責任を相手の側にすげ替えることで、相手を劣勢に追い込もうとするのです。さらに、歴史修正主義者の主張を否定しようと取り上げることが、逆にその主張を世に知らしめることになる、という皮肉な逆転も生じるのです。

歴史修正主義者は、否定されても否定されても、繰り返すことで、自らの主張を社会に根付かせようとする、といます。人間は、最初は到底信じられないと感じたことでも、繰り返されると、

自分の印象が正しかったのか不安になります。歴史学の研究者は、歴史修正主義に対し、「素人の愚論であるから相手にしない」と無視するか、逆に歴史的証拠を示して彼らの主張を論破してきました。しかし、「論破しようとすればするほど、歴史修正主義は活力と新たな支持者を獲得するように見え、また実際の議論は歴史から遠ざかった」と武井さんは言います。ドナルド・トランプが、既存のメディアをフェイク・ニュースだと言い出した当初、多くの人々は苦笑してやり過ごそうとしました。しかし、嘘や、嘘の入り交じった主張が繰り返されることで、これらは徐々に「もう一つの事実」としての地位を獲得していったのです。

歴史修正主義者のねらいは、人々の認識に「揺らぎ」を呼び覚ますことだ、と武井さんはいいます。こうして、学術的な知見に基づいて形づくられた歴史解釈や、長い時間をかけて形成された社会の合意は浸食されていくのです。

歴史認識に関わる議論は、何も外国のできごととは限りません。わが国日本においても、多様な歴史観が主張され、激しい論争になることも珍しくありません。現在の日本社会には、証拠となるファクト(事実)と、学術的知見の積み重ねによって構築された歴史観と、恣意的で意図的な変更を加えた歴史観が、同列で存在している、と言ったらいいすぎでしょうか。

「おわりに」と題された武井さんの文章から一部を抜粋します。

「よく見られる光景だが、書店に行けば「歴史の真相」「誰も書かなかった歴史の真実」といったタイトルが躍り、「通俗歴史本」が平積みになっている。図書館でさえ、歴史学の書架で研究書の隣に歴史修正主義的な本が並んでいる。大学生のレポートを読めば、簡単に切り貼りできるネット上の歴史修正主義が、読むには時間のかかる本の情報を7対3ほどの割合で凌駕^{りようが}している。さらに悪いことに、書いた本人は自分が歴史修正主義の代弁者になっていることに気づいていない」

歴史的言説に対する法規制の厳しいヨーロッパと異なり、日本社会では「真偽の判断は皆さんの良識にまかせます」というスタンスをとることが多い。そしてそれはある程度機能していて、仮に歴史修正主義的な「トンデモ本」が売れても、これを自分の歴史観として真顔で訴える人はほとんどおらず、もしいても相手にされないでしょう。しかし、と武井さんは言います。「しかし、こうした言説にあまりなじみのない若い世代には、歴史修正主義をそれと名指ししないと、歴史の一つの解釈に聞こえてしまう可能性がある」

この武井さんの指摘は、筆者が日頃抱いてきた危機感とぴったり重なり合っています。若者の長所は、出会ったものを貪欲に吸収する能力にあります。歴史にかぎらず、政治思想、倫理観など、新たな知識や考えを次々と自分の世界観の中に取り入れていくことができます。それは、若者の世界を広げ、大きく成長させる力となる一方、誤った認識、偏った価値観を若者の中に根付かせるリスクもあるのです。それでは、君たちはどうしたらいいのでしょうか？

私が、今、君たちに言えるのは、正しく学び、素直に思考しなさい、ということです。2500年前、仁の思想を説いた孔子は「学びて思わざれば則ち罔^{くら}し。思いて学ばざれば則ち殆^{あやう}し」という言葉を残しています。知識を学んでも、それについて自分の頭で深く考えることをしなければ、物事の本質は分からない。そして、いくら熱い思いを抱いても、正しく学ぶことがなければ、道を誤る危険がある。孔子の言葉は、まさに今の私たちの社会のためにあるように思えます。

『歴史修正主義／ヒトラー讃美、ホロコースト否定論から法規制まで』は、ナチズムを賛美する

ヨーロッパの歴史修正主義を鏡に、現代日本社会について考えさせてくれる、「読み応えあり」の一冊でした。中学生にはちょっとハードルが高いかもしれませんが、高校生なら十分読めます。すこし背伸びしてチャレンジしてみてください。(終)

注1)ナチズム

第2次世界大戦前から戦中にかけて、ドイツを統治した、ヒトラー率いるナチ党のイデオロギー。反ユダヤ主義、民族主義、強烈な全体主義を特徴とする。

注2)シオニスト

パレスチナに、ユダヤ人の国家を再建しようとする思想「シオニズム」を支持し、実践する人々。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。